

火とり梨子地に桐の葉高蒔繪あしでの文字は銀かながひ、籠銀毛ぼり雲烟出る所雲の内に少ありなまりにてふくりんとる也。

桐のはもふみわけがたくなりけりかならず人をまつとなけれど、といふ歌をもてあしでにする也。

後普光園殿説 香づ、みの外題は、肩に押法也、物語は中をし、歌書は口にをすゆへに、まぎれぬためなるべし。

〔御家流改正香道秘集〕志野三道具之事

一 志野宗信杯之時代、香具甚簡にして事少なき事也、香道世に行る、火道具杯も事多なりて、七種の具となれり、今も其古風を用ひば、借に三ツにて事足べし、名香一種焼に用、また古來の香盆の筋にも灰押香筋火筋なり、今も常に懷中杯に携るは、此三ツに而足り、又香箸を銀或は赤銅を以て作、先に細きぎざを付て銀葉置取に仕、能様に作て火筋とかね用てもよし、尤古來は寸法有、東山殿好也、左に圖ス。

香筋火筋兼帶之圖 (圖略) 長四寸貳分、かたち四方に作る、先貳分程の間きざを付る也。

敷紙之事

一 十炷香之道具を筋るには、敷紙を用べし、大鷹檀紙を貳ツ折にして、又四ツに折用、開て筋べし、金銀の箔を押して用も有、然共白紙を用、折々あらたに取替をよしトス、近來他流には香盤と云る物を用なり、平日の香には紙を用る事古雅也、香盤を用るは眞の時也。

さし札之事

一 差札といふ物古來有、象牙、烏木、或は黒漆にしたるも有、表に札の紋常のごとくに蒔繪杯にし、表に一二三四五と書置て、組香五炷有物に何れも用也、十炷香の時は、四をウとなし用、記録へ